

俳句本日

號 月 八



志江

第一卷 第三號

明治四十四年四月二十七日第三種郵便物認可
昭和十九年八月三十日(每月一回卅日)發行

昭和十九年八月二十五日印刷精本

俳句日本 第一卷第三號

有隣亭藏書

陸集	西垣正禪子選	(一)
層雲壇	荻原井泉水選	(六)
海紅句錄	中塚一碧樓選	(三)
指針を記す	中塚一碧樓	(三)
新俳句論研考(一)	西垣正禪子	(三)
俳句と時代性	内田南艸	(三)
開目鈔	荻原井泉水	(七)
各家近什		(四〇)
句評		(四)
句輯		(四六)
みいくさ集		

表紙 望月春江畫伯

陸集

卅禪子選

東京、鳥井仙三郎

母様へ伊勢の貝は噛めまい爐にをつて土産
慰問の品一つ一つの袋に仕分け爐の上
照りつづく蓬の山は白く路もありたる
蓬の山は山畑雨のふる黒き羽の蝶

東京 磯原 正 議

軍刀のことを話す今日なぜか粧をしてありぬ
軍刀をぬいて見せるもう幾度か夜の縁先で
旅先に思ひ出せし刀兼光もらつて行くことにせし
軍装の君で隣組貯金箱の廻つて来て入れる

岩手 照井 稗人

日々戦はげしもたいなさ山の夜がくる
艦になる木が倒れた音だけ蟬の聲
合歡の花こどもの斥候兵がある
雨が夏になつてゐる音の裏の池
もの洗ふせよらぎも晴れて青葉

東京 渡邊まき子

炎天のゆきき遠くから製材所の音
蠅叩きぼんと忘れられてる晝過ぎ
晝過ぎ雲がよくわいて味淋かめの青蟲
夕立の遠明りして緑葉が高い
團扇買つてて小母さんの名おぼへちやつた

東京 奥村そのえ

箒肩に加はる晴のみやしるの茂み
みやしるの庭淨め終ると近々朝の蠅
南瓜の葉雹にいたましく戦繰もかくやと
暴れめきしあとの桔梗など起し爆風のことども

久留米 高取 芳春

表は平熱の波で棚に糸瓜たどりつき
安心させて歸す床に故郷の螢が光る
螢の黠滅の中に故郷が、水枕ぬるむ

東京 標 静 淵

一番茶茶柱たち父の壽をいはふ
用水に柿の花うかみ界限の午さがり
しづかにわたらうよ石竹の花がふるへる
みんなそろつて太陽にいのらう秋のみのり

東京 吉池 良子

草蒨 雑木林の風はぬくう
肩から冷える 星空で光芒かすめる
支那にて

朱唇の佛頭ををろがむ佛花はかすみ草
更紗の蠟文字を讀まうとする庭の笹鳴り

東京 吉沼 晴 穂

歴史は日々の戦ひ我ら日本人
若芽をつまんその手勝鬨にふるふ
乏しさを語らず我等神國に呼吸するもの
あの散つた呼吸がぼんぼりにうつりさう(舎弟新盆)
木蔭に風あびて蟲の世界を知る

名古屋 鈴木梅宇人

將兵等川に馬も人も入れて瀨音
驢馬の聲かなしく銃砲に馴れて夕空
硝煙まだ匂ふばかり麥黄ばむばかり

東京 馬場 善一

一望の山々あり青稻風吹いて白い雲
驛の菟麻大きく驛員朝禮をその前
山に住む人ら山にあけくれ蠶に生くる

東京 市川 稔

山鳩はくくと鳴く秋を一人に廣い畑
校庭の女子青年にし花賣る花の彩り
たうもろこしをもぐ午後を空の大

四日市 川津 一之

警報旗立てるをこゝろ作業きびしくす
鐵かぶとと戰鬪帽と室にきちんと病む日
燈管の夜の寢息もつたいたくある

四日市 伊木 祥園

甘藷挿す手曇。天へ老の敵を撃つ手
暑さ言はず一機一艦へ槌みんな振る

横濱 田代濱女生

今日も防人送るどよめきがしてぐつと胸にくる
ひた走るたそがれ丘は一すぢに水が白い

東京 廣井 義秋

水まんまんと差す叡山苔はひこむ邊
たまかな生活に慣れ南瓜の種子今日もほす
だるさ暑さ口にすまじよ戦線への便り

東京 星野 區中

萩のはなだより征きしなごり夜おもふ
近頃繪看板なぞもかく畫工に石楠花が咲く
煙草の箱にたばこぎつしり瓦に會てある

東京 安食 實

晩夏一本のここに野生の鶏頭生えり
蟲が鳴き秋に近くを隣家征つてゆく
富山の薬やさん夏を廻つて來て街に住む

名古屋 島村 辰次

旅を戻りて空の明るさ胡麻を少しくまく
兒童がさげて戻りし一つの勢瀧にしてある
暗い夜の螢流れふと皆が大本營つげる

名古屋 郡司 民男

家人の留守を手紙などかく木樫あせんとす
荒れて來ると云ふ氣持妻あらぬ夜の庭草
馬糞の干草運ぶ山の端松明赤い

東京 北野 正夫

ずつと胸にあるサイパン島のこと旅にても思ふ
石疊の小さいどんぐりの實一粒一粒の秋
おかれて一人着く英靈還りましし家の灯

東京 伊藤 秀雄

庭すみあまい香はくちなしのそれに引かれるいとま
とまと水に冷々放すひと休なさいませ

四日市 若林 石玲

第一線を語る兒と苺いろそへ夕
眼をくるり百日育つ應徴のあの日生れて

鎔鑪 爐 炎 天の重壓へ吼える 福岡 菅 壽 吉

炎 天から風を産んだ飛行機が去る 空襲を覺悟の旱の田に畑に 福岡 佐藤 徹夫

苗代へとどく程に灯り静かな うれへ顔の小山羊が涼風と昏れる 垣の外の月明々と梅雨霽れる 東京 岩館 テル子

畦草のかほりすがしく宵の明星見つけた 陽やけの背くろくたくまし手を休めて母(甲種合格) おはぎ甘く出来てけふ朝の日本晴 東京 高内 千代子

雷雨が来さうしきりに蜘蛛が巣をはつてゐる 明月がらす越しにふと時計がなつた 東京 湖 光子

雨の日は紙の敵機を落す子ども部屋ぬち 南瓜ぐんぐ伸びる三人の母となつて 落 日毛 蟲の上の露が光る 東京 大熊 敏治

炎 天 畑に足跡が浅い 山形 會田 保男

はらから青田に黙し復仇を誓ふ(サイパン) あんなに好きだつた櫻桃戦役の義兄へ供へる 東京 清水 豊

夜踊る太鼓しみじみとみる顔である

雨の一日を来て雨の青葉湯にほぐす旅 福岡 牛尾 紀代子

豫科練の白服朝日に映えつばくら 兩岸の緑すつきり練習機映つて消えた 福岡 福永 友一

はるか浮くポンポン船の夕焼けて来た 油照の足とめて仰ぐ皆仰ぐ飛行機 福岡 前田 まさみ

貼紙はサイパン玉碎の油服動かない 片翅の蟬砂濱にサイパン玉碎の朝 福岡 横岡 柳光

泳ぐ兒等の瞳を集め編隊機悠々去る 嬰兒の汗ふいてはふいては色の出きたトマト 福岡 秋本 豊治

烈日下日の丸マストにはためかし船造る音 昏れそめて築港静か波紋涼しくひろがり 傑 人の碑を仰ぐ蟬時雨 福岡 安田 黙川

サイパンの勇魂へ先づ夾竹桃を手折る 玉碎の悲報腹しぼる向日葵しいんと日に向き さいばんの勇 武藏野 古川 直右

ほいほい雀飛ばして苗代の青さほんのり 涼風藤棚をつつぬけ俳句の道教へられる 歴史を秘めた茂みの眞下船を造る音の 福岡 田村 九一

長野 中村 久重

悲報又峽中秋に似たる蟬啼れ
記念寫眞とどくこの中の五人は征つて

福岡 南 畝 三 坡

空梅雨の防壕に伏したおち着け落ちつけ(敵機來襲)

照空燈の光芒にくつきり浮き出た敵翼五月闇

山形 渡 邊 舒 生

夕焼け重い足どりを家へ田植は明日へつき

勝たねばならぬ 田 植 へ學童學童

熊本 福島 流水

梅雨晴れて大いなる阿蘇五岳眞向ひに見え

我機銃火を吐き夏草ちぎれ飛ぶ

朝鮮 藤 下 ふ さ

作業終ふ赤い手振り擧げ空の何處まで青く

鍊成終り深呼吸空の眼を閉ぢこゝろ

臺北 山村 春 王 月

まつさきに兵を志願する陳兄弟にヒマ園ひろし

いよ／＼身近く戦を感じず蓖麻とり入るゝ

東京 内 田 克 子

輕氣球高く上る飛行機の音がして來た

福島 飯島 富 喜 郎

はたるふとあすのあつさしのばれ

東京 田 中 光 一

きのふの月が朝の青田に風とゆれてゐる

東京 佐藤 守 成

農民に生れたよろこび牛がついて來る

千葉 内田 とき子

夕立がくるらし決戦農園もくらくなり

千葉 辻 良 々

ことし南瓜の花大きく海風たへない

海風まいにち吸ふのでこの手の足動くのだ

神奈川 山城 あきら

寝てゝ汽車はしり岡山だ朝だあの爆音

神戸 多田 與 助

きりりがなり蟲が鳴き雲の流れる空のひろさ

京都 下村 江 岸

丸い山の上をいつたり來たり飛行機いくつも

京都 渡 邊 長 生

戦ふ川の流れはやくもう月が出てゐる

東京 石井 芳 草

子も勤勞の一日をすごしよくねむる

東京 小野 久

すつかり夏を感じいよ／＼決戦齒をみがく

福岡 池田 房 代

モンペ涼風にふくらし工場へ馴れて來た足どり

福岡 石下谷 乃不女

炎熱の空を壓して堂々の編隊機たのもし

福岡 浅野 光 子

縁に出る南瓜 照りかへり

東京 玉井 實

ひとりの旅は町に近くをり簾鳴をきく

東京 戸谷 是 公

川べりの女籠の瓜があり流れは流れる

夏千葉の雨になりし街の茄子は泥あげて街中久世新一郎

千葉 小畑 進

旭は向田曉の青田とどろきて森の太鼓

東京 吉田 實

白く月夜の戦勝踊りす征つて行く男

陸風集

浦和 山木 六合

お馬になりわんわんになり梅雨の日老いたるめをと
蚊遣焚くにもいくらか日のつまつた縁のしめり
古竹門を覆ひ梅雨暗く降り明るく降り
たつた一人の弟征き木々の茂りいよ濃く
笑みつ手を振り旗だすき群から離れてゆく

東京 渡邊 如蘭

虹の飛行場蟻が蟻をはこんで行く
夜の山なみ近々と機體整備の汗ふく
遠い蛙に明けてくる機體整備
山のあなた夕焼て吾が家遠く暮らす
くだける濤音とほく翼の上で仕事してゐる

マライ派遣軍 鳥羽 啓人

白雲とぶ南の空にいつ君を仰ぐか
敵陣へスコールを舟艇まつしぐら

高田 清水 晝棟

鴉等の飛ぶ方向に海があるそれと直角の残月
残月と雪の中和光線が構内に紅葉する

上海 大島 蓓花

銃後もないカンナの花の赤さ見つめて

椰子の風落つ 噫南十字星輝く(徳古賀元帥)

日本海海戦今は覇を七つの海に

出征 赤星 竹嶺

雪知らぬこの子あはれこの赤壇
若芽日にしげく故郷の雪人も通はむ
茜ぐも立つほろ酔はむ暮れゆかむ
戦友の歌見つ椰子の芽を見つこの風ぎに
この島さかる日の銃を磨く茜たなびく
出で立つ日の吾も手をかざしぬ
南海 吼る日の島を別れる滯
馴れた住居の諸が煮て見度くなる

高岡 森 抱葉

わが畑のたうもろこじ茂つてがさつな汐風
茄子ちぎつては消ゆる朝露のひとつひとつ
トマトのむだ芽摘んでやつて旅に出る
胡瓜たくましく伸び海からまつ赤な太陽

岩手 加賀谷 灰人

草の茂りも星夜の遠い稲妻
松林の徑はあさしづかなる浪おと
朝の虹のたかつ秋草をゆく
朝の虹のたかさ一機二機ゆく
夕べの雲のながれやがて山を下る

層雲壇 其一 井泉水選

鳥取 重村 百堂

けふは山燒きにゆく腰のにんぎりめし
一人は苗代へ来て去ぬる夕空山のかたち
山から出た月がこの町筋はつ夏
蔭膳なぞも朝早い夏になる朝餉する
朝は涼しい山を近く學校は音讀する

京都 井上 充夫

いちにちが青葉の中のお日さん木の中の木の子
夏がひるからこの丘の木の中こらの子ども
征くべき旗が路次の奥の青桐の風の葉も
あくまで夏の空鋪道日に向いてゆく朝の電車の中
からつゆのくものすのくも蜂のすの蜂

福岡 原 實

旅立つと仕度して朝のニュース春雨
日暮れ静かに山櫻と木蓮の明るさに居る
たたかひ更に春、生れて眠つて笑つてゐる
起きられて病院の防空壕を見てゐる花のちる
もやの中あぢさいの花空襲の夜はあけてゐる

馬山 山本 木天 蓼

麥がうれるころに鳴くふくちうの夕空青い
朝日一ぱいの山に鳴く山鳩、かげる山にもなく
茂山の見えて蠶飼の家かその方への道

夜の影、牡丹くづるる時の静かな
さあつと雨ふつてきた麻畑四五枚

石川 高崎 貞之

花に葉が見えてゐるでんがく
めふいにくればふんする
夕日を垂り穂のひくさにして遠くから来るバス
雪雲から洩れて陽が家の前溝川
おもやのつららうまやのつららとしづくする

横濱 青木 青夫

うぐひす松の中行くと海へ行く
回覽板は傘さして隣りへ山吹さいてゐる
風が荒れもやうの雨となり牡丹は牡丹色
あしたのけむり立てて一本の桐の花雨ふる
梅雨にはまだ早い雨の青葉が廣節

東京 岡野 宵火

女の洗うてほしたもんべんカチわたしのシャッそんな木の芽時である
春の日暮がいつまでも川の音さやさとときこえてゐる
曇る日川原にきてなんとなく石の間に生えてゐる草
牡丹のはなの色をもつと紅いろをキャンパスにする
くるみの木の枝垂れと水たまりの夏がきた童べたちと

長崎 森 久樹 男

けやきの木まいにちばくおんがきていつてしもう
もくれん地にかげを十字架
ちちをなくしてからののははとふたりの胡瓜もみです
家のまへのトマトけさ一つもいでゆうべも一つもぐ
ほうたる、青いあしのつきよをでて征く

東京 橋本 淳一

月の方へ可動橋がくろくかかつてゐる春
わら家に着いておそ櫻の蛙聴いてゐる
栗の花柿の花建長寺から流れてゐる水
庭でお辭儀する青梅がおちてゐる
圓覺寺の門はレールからすぐに十薬の花

福岡 品川 幸一郎

入港する前の鐘が鏡に映つてゐる空
まいにちの雨が青葉昏れずにある椅子
このごろ鳥が暗れてばかり白浪
海の空が夕やけてゐるのを工場迷彩
すつかり青葉したおのおのの机にある花

福岡 鹿谷 皓樹

草深いお地藏さまのあたまが暑さのぜつちやう
休むと枇杷の香り歩くと青い海が見へてくる道
ふうりん、月がうつくしいといふ病人も
かげると涼しい石昏れないでゐる
隣の屋根も日がおとろへてきた南瓜の臍

沼津 内久根 聖巳

あめが小松菜の花にやんでゐる
船が出て行つてからの夕月がクローバの花
應徴土としての仕事毎日夏になる雲
月があかるとい道がきうり畑
ラッパふいて乗合馬車は春の日港までゆく

横濱 東松 八洲 雄

一年生いつも連れだつてけふ傘もつて雨の木蓮

屋根の一八うら山は若鷺の子供下りてくる
あれこれ忙がしい旅の奈良に来て馬酔木の雨
艦は艦装中の若葉に夕日の静かな
この邊うろおぼへの柿の若葉と土塀と丸太格子と

岐阜 水谷 青杜

風晴のして麥秋傘もつて吾子歸つてくる
爆音去んだり來たり青若梅雨に入る
半つれて梅雨ころの雲笠はぬいでゆく
うちはもつて月夜、戦地の話になつてゐる
櫻がおくれてゐる山の夫婦のくらし

弘前 竹内 竹童

二階住居も山に向いて山のあしたに夕べに春
女子挺身隊として復唱すそこら萌えそめてゐる
やつぱり達者でゐた一本松の爺さん今年もかつこり鳴いてゐる
芽ぶいた枝にも雪が朝の煙出しのけむり
陽がさして來て湯の中出でて部屋朝日を掃く春

明石 三好 叢一路

涼しいうちになんにもすませてゐる、しづく
夕方暑さこどもらがらくがき
白い牛が大きなお乳をもち夏を鳴く
春になつて母の命日、一寸お萩のやうなものをとさへる

東京 宇佐美 一步

ひと時は爆音もなく春の日昏れてゆく松の木松のしん
麥の穂の青い風が移動慰問リュックの乙女たち
明けたばかりの富士とすでに畑する人とを車窓
屋上箱造りの菜園にきて春の空見てゐる

東京 村田 藤庵

南瓜の花が雨の窓あけて素讀する子で
 ポール立てて道になるトマト畑日にやけてゐる
 東京へ一時間位の通勤距離であるじやが芋増産
 黒穂を焼く持ち寄つて先生が持つてゐるマツチ
 子供等は西日するまで授業の無花果青い葉

東京 落窪 京太郎

花屋の菊あかるくて朝の目、日曜出勤
 秋晴をさなく並び足袋の裏白く駈けてゆく
 秋雲は友軍編隊のあく迄すみわたるなり
 訪ねて柿の木に白雲、征つてお留守のお子さん
 まつたく小春であつた一日暮れてゆくカーテンの皺

横濱 新納 香樹

乏しきを足れりとし梅がまばらな春
 庭のつつじ靴音高くきて征きますすといふ
 汽車から月が三日月、を見てゐる娘さんと
 戦果ききをはり夕餉時梅雨さらに降る
 子は歸らず父更に征く白百合蕾み

栃木 栃本よし雄

雨がいつしか月夜のかげさして青芦
 浪の音はあかるい月夜のうちはうごかしてゐる
 机に矢車の花と軍需會社法とたばこのうまい朝で
 匂ふやうな娘さんになつてゐて桃の實が朝の葉かげ
 道が海へとほつて桐の花が夜明け

静岡 澤木 正

しづかにしらみ渡り麥の青き穂並であり

松の芯や白い雲やことしも病んだまま夏になる
 霧雨、桐の花は屋根のうへに咲いてゐる
 木蓮白くほころびまいにち爆音のする
 雨やんで菜の花大根の花うちの前はたけ

大阪 南川 鴻亮

松風の音川の音ことしの松蟬鳴いてゐる
 上にも鐵橋の、下の鐵橋汽車の通る夕が夏
 日が入りてあかるい水の輪の中の鳩
 爆音の下の一畝は暑い唐辛子の白い花であり
 むすこが二人征つてゐるのです蜜柑山へ松植ゑてゐる

熊本 木庭 皓龍子

ほたる、待避を告げてしまふと私も待避する(三月十六日)
 君が征く朝のひまの苗しづくしてゐる私は學校へゆく
 誰か口笛を豫科練の歌を吹く青い芝はつなつ
 ずつと線路の上の空間、にほのかな朝があつて
 地球の半面が激戦である月がぐんぐん雲を切つてゆく

愛媛 村瀬 汀火骨

西に、もうまばゆくはない日の麥の穂
 ほんにつつじばかりの庭の赤いものなかの白、朝
 桃に袋する日の試射らしい硝聲くもり
 平常通りの別れをいひ此朝涼しく出でて征く(弟出征)

東京 浅井 冠二

梅雨ぐもりの朝の陽が竿に隣合つてゐる
 旅で雨の日は番傘さしてゆく海で
 かぜがもろこしの葉にあづけてきた子
 花いばら、湯の村は湯の流れてゐる

駐〇〇 加藤 裸 秋

日のさせば藏のゆき木のゆき
まだ雪の残つてゐる遊園地が川のそば
牛が足うめてゐる遠賀川青葦はよろし
芦のつのがれてゐる青い山ずつと炭坑長屋で
一と山笹焼く疎開荷物は引つこしてゆく

駐〇〇 飯田 露 草

譽の家とあつて年寄りふたり朝早いものはな
軍港静かに灯を點もす酔のものにしてことしのきうり
蠅をうち蠅をうち炎天打ち止めない
あらしのあとの洗つたやうな砂で蟹が目を出しとる

新潟 金井 三 良

雀がないてゐることの家をこの家來るに學校でも鳴いてゐる
山に月の明るい月夜の村のラジオが家々
鉦の音はあの世へゆかれた雪の月夜で
けふからか靖國の家雪降る藁屋根杉の木

銚子 名雪 理 輝

日にむいて勤めに出で日にむいて勤めを戻り麥の穂
今日の戦を闘つてゐてくれる弟がふたり、夕焼け雲
松の木 松の芯 天邊で啼く
ちよつぴり水に稻の芽の黄いろい古里はよろし

岡山 近藤 次 良

浪音のする春の夜静かに功德を云ふことば
暗いうちから田にゐて芽ぶくまはりの木明けてくる
ふるとすぐ止む雨であるらしい山椒木の芽
若葉水音朝の雨傘さして詣でる

但馬 岡田 琅 玕

配給の鰯は繩に干して花のをはつた雌しべ
すすいで干して柿の花がたくさん柿の葉のかけ
わらやのうらおもて風が吹きぬける柿の花こる
夕立さあつとあがつたあをぎり青い幹
藪に沿うて流れ染屋が近くにあつてくぐひす
蛙の聲の一個の小さな小包、できてゐる
お蠶さま一眠りして夜明けた山が家の前
蜂の巣にもつもり夕刊配り

栃木 植田 市 龍

すだれあげてちよつと西日のさすほどな、そこにうちは
一寸かへつて來てふるさとのもうかへります遠蛙のこゑ
防空壕の中まで月夜にして出あるく
溝の上はみ出てる南瓜の葉もけふも働いて夕焼

神戸 磯崎 雄 一

木が一本一本松の木住宅営團監督部屋つたつ
おほばこ濡れてゐる朝の揃つてやる體操が景色
今決戦、村に田川水澄みて流るる
犬はこのやうとびまわる一めん田ならげん畑

濱松 伊藤 雅 章

牛舎のほとり流れがあつて芹摘んでゐる
庫裡の二階は戸があけてある栗の青い房
宿の寢巻で朝は佐渡が見える濱にもはたけ
葉がつやつやと柿の葉でかけ樋の水落ちてゐる
夕べしづかに四ツ手掲げてゐるお勲黒とんぼ

新潟 小原 甲 陵

牛舎のほとり流れがあつて芹摘んでゐる
庫裡の二階は戸があけてある栗の青い房
宿の寢巻で朝は佐渡が見える濱にもはたけ
葉がつやつやと柿の葉でかけ樋の水落ちてゐる
夕べしづかに四ツ手掲げてゐるお勲黒とんぼ

愛媛 佐伯 美則

野火の美しさは闇が深くなる風が涼しくなる
作戦行動中と弟の太い字が、ヒマの葉のたくまし
ふるさとは海に夕日し幾山かさなりて夏めく
麥秋の海に入る日の今日も出てゆく船の灯か

釜山 田中 操

今日殊に雲が美しい炭がまが煙を上げる
いばら白く咲くその向ふ兵隊の通るのも夕がた
からすこのごろ巢のいとなみを夕べ早い月になる
麥刈へ生徒達行進朝早くから暑くならうとする

朝鮮 本田 閑嶺

海の浪の見える温室の中の花外の花春である
橋を渡り朝日さす春になつて流れてゐる
風のおつて温室の風車はまはつてゐる月夜で
汽車で鐵橋をゆく時一雨はれた鐵橋の下

東京 角田 重信

月のあかるまへの水のいろや屋根のかたちや
すいすいとつばめが水にいちじく繋つてゐる
はなびら雪と敷いて夜がふりやんでゐる
ころころと蛙の、朝がまだ早くて門衛さん

伊豆 佐藤 専子

池があつて春たけた草のたけ波音
春風の長い列の一年生は一番あとをいく
柿の新芽、雨あと音たてて流れてゐる

山形 齋藤 つ人

警報が出て夕焼村の通り炭馬車歸る

桑の實子供顔迄染めて田植大方となる
炎天ポプラ大樹一本老人かくしゃくとして

但馬 平位 青水

日ながうなるので大工小屋ぐみの芽
海棠さいて石の井戸の静かな醫院にまつ
流には土橋のあるいばらの芽

横須賀 長島 夕汀子

けふは起きてゐる朝の豆の芽
ぐみの實よく落ちてお隣とも好し
芽ぶいて月の下にある屋根と屋根

弘前 里見 御骨

最後のトンネル出てからの隣近い冬の海づら
松の葉にふる雨も冬の山近く御陵への道
ゆきふりやんでつきよになつてゐる屋根

栃木 日内野 千一 路

遺作展で、白い杏の花咲く繪で
虹、空がしづくしくしてゐる
闇に螢の明滅三たび征かする(弟の出征)

福井 森田 十雨

櫻咲く夜の話をば更けやすくて拍子木
編隊飛行いつてしまふとしづかな田を鋤いてゐる
飼葉しまうて遊びたいので白牡丹ゆふべとなる

長岡 山岸 稻青

麥の穂に宵月が日本海しづかななり
雪のある山のすがたが田の水田植してゐる
校庭朝の訓示松のしんすくすくのびてゐる

東京 原 農 平

梅の木の下落のとなら留守番してゐる
けふはしづかに防空壕にも雪のふり八ツ手の葉
松の木の中から麥の芽出たばかりの空を行くからす

駐〇〇 北田 千秋子

日々忙しく春菊の花暑くなる
生けて葱の白い所の慈雨續き
蝶々前ゆく徹夜明けで私が歸る

東京 渡邊 燕 兒

夕日かげるとかける若葉が池になつてゐる
螢とぶと汽車のレエル、シグナルずつと青くなつてゐる
あせびの花、ここら人家のある月夜になつてゐる

東京 三 輪 薫

アカシヤ咲いて並木道英霊をむかへるけふ雨がふる
でんでん蟲飛石づたひに傘さして出る
風呂屋のけむりが久し振りで梅雨空星が二つ二つ

川 越 横 關 碧 樓

家が薪抱へて竹藪の前そのよこ道があつて春
だけの子たけになるえだだして警戒解除

秋 田 増 村 辰 郎

かつこうなけば蛙がなけばことしも明日はおまつり
ことしはいよいよ決戦明日から田植糸の風呂焚いてゐる

富 山 高 橋 政 二

足なれて蜂の出たりするお宮のひさし一寸一ふく
無花果畑に道があると家があつて遺家族標札

富 山 島 山 實 治

音が工場が煙のふけて春のうるみたる星
花ざかりのたびたび響いて通る貨車が水田

熊 本 石 原 元 寛

月夜の豆畑をゆく潮あげてゐる豆畑花ざかり
月夜竹林あかるくて竹の皮落とす

駐〇〇 法 雲 寺 三 郎

木の芽がまぶしい野營の三角頂上、朝
日に日に軍人となる新兵さん逞ましき草原かな

東 京 夏 畑 望 子

葉櫻雨ふる雀かへつてきてくれてゆく
桐の花高くさいて雨やんでゐる道に出て

島 根 佐 々 木 行 人

鮮人らしくて山苺もいであるそこに兒がある
供出の薪の山からつゆの陽がてりつける

名 古 屋 久 保 源 三 郎

青梅黄いばみてくる空も必至待つあるところ
つきのいろに海をかんじてゐる藤椅子

仙 臺 芦 立 陶 紗 子

風にある月夜が海へ一本道
月が出てからの夏蜜柑の木と水音

兵 庫 金 平 二 火

爆音つゆのふらない若葉が青葉となる
降つてゐる驟ふつてない驟麥刈つてありまだであり

兵 庫 竹 末 白 牛

たにし口あけて靱が芽をだしとる
泊められて山うどの味も月は出頭山のかたち

四號棟の空に月がでて夜勤に出てくる
東京 清水雄二郎

並木の青葉その子もこの子も新しいモンベで疎開の話で
東京 作間比露詩

吊皮揺れるばかりで夜が涼しい
横須賀 矢島 寒雄

風速計が廻る見える窓がある教室に變つてきた
東京 仁木 堅二

こころひとり食べられる草とて摘んでゐる
岐阜 間宮折鶴子

いちづに草刈り朝日さす所ささないところ青い草
大阪 勝 醜句男

女来て橋を渡り青い山がある
長野 八重田保郎

股引は洗つてかけておく蛙ないてゐる
大阪 谷 雨 滴

ひる前しつかな看護婦食堂の壺のダリや見えてゐる
香川 西崎 千草

蘇鐵がずんぐり窓の外ガアゼ干しておく
駐臺灣 砂川鳳凰木

暑く花のうるはしさ風がある窓
川崎 深澤 營介

白い道夕暮れる裸馬ひとつくる
駐〇〇 並木 緑 朗

敵を待ちて山が繁つてくる鶯笛でも吹いてゐる

軍歌演習影は木に月が出てゐる
駐滿洲 辻本 鏡石

防人としてこの島の貝からを手にしたりする時間
駐比島 五十地 皓一郎

朝のうち島に白い開襟シャツで出てゐる
神戸 高柳 登一

警報とけた朝の隣の南瓜の大きな花で
愛知 積木 晃 楓

けふも曇りて空のその道けふの爆音
駐蒙北 新村 和也

軍歌が過ぎてから夕日に水撒いてゐる
姫路 古城 白鷺

夕焼ける遠い地平は敵のゐる丘になつてゐる
駐臺灣 根田 月子

雲が雲が走つて走つて月が出る
千葉 長谷川 一郎

すねてみせる親のある風鈴に風のある
廣島 野北 菊江

ひとり汗のあとすつばいくだもの
新潟 金津 明子

雨があがつた一面麥秋速い電車で
三重 水野田々 詩

その報道が耳にある星夜の電車待つてゐる
尼崎 廣橋 清志

椿の花かさかさと落ちる音の山道雨はれたので登つてゆく
山口 藤井 鳴木 兎

海紅句録

一碧樓選

〇〇隊 本間 昇

熱風日々これに備砲あり空白し
夏夜陣地選定であるくらきにうごき
河の水細く流れうつくしく棗實の青く
月明ありよくのひぬ棉に棉畠に伏しをる

諏訪 矢崎 博敏

田の水をいれる畦豆犬きい
管制下音して桑の葉に動く蠶
あつさ地に残り日暮れし芋畠
兵となるいま麥畑にわく夏雲

沼津 伊藤 彌太

山あり早苗田あり故里みな決戦す
戦刻々豆の葉あをくしげる
散策する我をうつたうもろこしの葉
來ん秋の親しさ思ふわが繪の黒さ

立川 守矢 日出男

草の穂青しわれら戦塵にあり
戦意地に満つ夏草の揺れやまず
青葉の照りを感じる部屋に機械を据ゑる
囀の聲する地の回みの穂草風あり

東京 滑川 三千夫

馬鈴薯の花芯黄にして朝にして

父親母親にも眼に殘照の桐の花
はこへ莖長く連なり引かれて白い根
夏日某日友は瘦身を草に起して應へ

新潟 三雲 城東

道埃くる風向き木綿の種子を蒔く
茄子苗をもらふ妻が朝のぬれし手にて
投網打てば水から風吹きて芹の花
青い山見えて身近くゆれる菜の花

宮城 塚 庄作

板の間に坐りこゝろ桐の花さき
青々山へ來し牝牛にある遠景
麥野が大きくうれる朝霧の太陽
子ら遊ぶ土のいきりじやがの花さく

名古屋 平井 青三

松の花のなか松山下りてくる顔見えて
梅若葉し落もかさなりて茂り
どこも家が低いどこも無花果の若葉
工場板壁に陽あたりし麥が豊熟

仙臺 山下 泰山樓

醫道たふとお召あり栗の花今をさかりて
矢車草花さき防空壕一方に道あり
雲かげ動くに一機二機飛ぶ花茨白し
一兵としてお召あり炎天ねむの花

佐渡 金子 壁人

トマト大きく植はり我暮らしの薪をつくり
夏潮打ちつけて來る片口の水のむ

栗の皮むく夜深くして坂の上にある家
打ち込む鉄先石にあたり土深ければ

室蘭、伊藤 二一郎

豌豆の實入り潮の動く朝の海
船が揺れる積込する人夫たち暗きに汗し
水鳥幾羽か入り交り祭の幟たてり
船に積荷すみし海面夏の雲出で

香川 新田 巢州

黄昏百舌鳥なく池の邊をその方へ歩いて
かに赤きはさみを立てからつゆ日々
土の手ざはり喜びもさすに雨後の山々
雀ものをついばみて苗代の香り

岡山 岡本 草二

壕の深さあり向日葵こちらむいてある
鉄打ちひびきつくく濱に咲く野人參
夜の街をはなれてくる田の田の水あかり

石川 松原 颯々

七夕笹たてゝからけふはお宮で遊ぶ
浅瀬舟もろ晝のさどなみにて親子
あるじの出穂揃ふ畔もろつくしい黍

山形 澤 尙之

卓上の紫陽花淡水色で匂はぬ花
紫陽花淡水色でまんまろく握りしめたい
青空と雲とはつきり別れ涼風吹いて

東京 米田 喜雨

瓜見事なる空地の永き一日

風白く吹く冬田日々近づきがたく
しんから山々が冷えてくる黙つて急ぐ

青森 井上 星樹

笹山崩えんとし放牧馬の背光るなり
少女達のこゑする玫瑰さく丘をゆきつ
わづか雪残る笹山の笹噛みて放し馬

宮城療 日下 丑松

癒えるを信じ眞夜中閑古鳥鳴く
療友の心犬つゝじの花大きい
湖面すれくゝに蕪水にあたることあり

岡山 仙田 黄葛

麥穂を出したのと葉ばかりのと山が遠い
眞上から日が照り除蟲菊咲いて島の畑
冷く日照りこの畑の南瓜固いと思ふ

香川 中野 健三

トラツクからおとすドラムころがすにみんなが裸
友來れば友に話あるいづ方もひでり夏の日
青い林檎子らとかむ林檎すつぱく

東京 下平 天耳

朝釣するお濠端草の穂かげ竿のかけ
夏河鐵橋より低くとぶ鴉ありて朝
芦むらに波面につゆの雨降り放水路廣幅

諏訪 中村 常男

征くに牛の事ばかりいふ麥秋の土間
軒の茅厚いそこに雷雲うごく
つばめ裸子落ちし土間小さき草生え

新潟 小川 光明樹

部隊ひたゆく道の山吹の花踏んでしまふ
兵舎まはりのアカシヤの匂ひ目さむる

横濱 申上 徳義

工場の騒音のなか暮ばら垣の赤い花
川水のにぎり雨霽れし馬鈴薯の花
房々桐の實生りしあしたにて薪を割る

富山 中川 尙三

今朝雨降りつばめがゐらない軒の巢
突然蟬鳴いて眞晝のわが家近く
炎天勤勞學徒たれもがその學帽を戴き

岡山 二宮 秋歌樓

草を刈る薊が咲く野の朝
夏帯の者もう見えない青田の徑
戰場へつゞく地に伏して田草を取る

青島 瓜生 敏一

春ゆふべ廣い積にて少し冷えて
柿の若葉に遠く白雲動かない
立つに足もとの豌豆の花白い

宮城療 村上 幸吉

海にあかるさこの端へ養鶏のことで訪ねる
紺青のうしほ葵は莖高くのぼりある
熟れた杏が市に出る頃となつた日中を通る

宮城療 齋藤 達也

菖蒲花咲きいま憶ふ父の顔
仔馬にたてがみあり青草を駈けるに
わが闘病地に蔓草蔓を伸し

長岡 藤田 三六亭

日覆して誰かゐる静臥室沈丁花咲き
麥の穂が白衣に包ぶ丘に一休みする
彈着遠のいて知る朴の花白い

宮城療 土屋 國男

子等の嘔む胡瓜われもして見る
夏日鐵削るをみな切粉をかむり
夏の朝の體操する降おろしの風

秋田 高橋 安榮

夕べ雲残る窓に熟麥が迫りくる
待避壕陽に翳り草の花白くあり
多くを言はず春大根を下げて來し男

東京 金内 錫四

風青草を吹く水鳥水にあり
梅雨空を窺をあげける
から梅雨を山羊鳴ける草中

備前 二宮 香芽子

春日の土手に土手の長さに天あり
桐の花咲く朝屋根屋根かたち据わり
青葉に風あり茂りの下の人へ近づくと

〇〇隊 大淵 青柴

強行來し山道盡くるところ朴の花

ゆすら籠に盛られ二三枚のみどり葉
いくにち雨なくて庭にぎいす鳴きて
枇杷の益をかこみ枇杷をいたゞく父と子等と

層雲壇其二

山形 佐藤逸仙子

君がたしなみ暑い日のホック外さない南瓜のはな
月夜がまるい山のかたちとなるももはたけ
海へ道が一本の夏たけてある
月のいよよあかるい電弧銲接のスパーク
ほた火のはぜるるなかのまめ

秋田 下總 磁郎

かつこり連峰の麓の教師できて住んである
山へ泊つてやまの月相客かせぎにん
今日は壯丁として學校のもんさくらまにかい
子供友達ときて山のわらび馬が歩いて行く
いけ垣しろばら甲種や第一など話して行く

千葉 關根ふさ子

青梅ころころとあしもと夏がくる
外泊のがつしりと大きな靴であるそろへておく
幼く歌うてもらうた子守唄歌うてやりあふちの花
梅もまろくなりまりましたをかき裏へ續けます
父は兵として南に、此の子を抱けばつづら梅の實

大阪 青 應香

麥の穂京都が近い祭提灯だしてある
このごろ空まします美しく馬鈴薯花つけてある
雨のふれば植ゑるばかりにして山崎邊雨となる

自轉車で電報がきた青葉のホナルしんかん
明るい灯の色がウインドの硝子食器を雨

東京 日野 素木

こんや月のあかるい木櫃の花も爆音
營門の内の櫻外も櫻の、新兵さんけふは外出
その妻らしい女面會簿さくらすぎである
雨はれて兵隊さんの来る櫻並木も町通りになる
生きて還つて来たことも竿にふんどしのしろく

大阪 菅崎 蓮雄

月とあゆみのはやい雲があつて冬の本
あふむけにゐてねずみがかかりかちつてあるよる
かかる時病みて春しづかなる一汁一菜
もう雲の形がなすび苗箱に植ゑ終へて夕べ
決戦南海を思ひそれぞれの星の構へ春とはなり

東京 里井 正子

くるる水に舟をうかべ暮るる雲が夏
初夏枝へともる灯をかぜゆれてある
降りて驛の素掘防空壕とそのへん暑い草
ひつそりと雪の下咲く三機五機高度編隊でゆく
一本橋ひつそりことからが鮮人部落ぐみのみ

和歌山 梶本 芦城

小梅こまごま實をつけて子供夏服
朝は草より青い色の蚊のとぶかやをはつす
雨の雲が動いていくいちじくの木の青いあじく
南天の花、窓は一つもつて病んである
紫陽花ほけそしばらく熱のない日のつついであるので

福岡 藤川 白涼

てふてふの影畫になるとあふことにする
若葉をちよつとぬらした雨が喫茶店の前のあめ
青芦あめの舟がつかないである
ふりさうな風になつた桐の葉
海からの風である時計のふりこ

東京 印南 健治

箱へ茄子そだてて日暮れの風ある風鈴
日盛りは松に社の高い石段
鳩へ鳩へ両手ひろげて歩けます
雪くづるる音の朝の膳にすわり

愛媛 武田 桂

みんな征つて獨り病んであるやうなまいにち木の雨
水にそうて野茨の、一筋の道はある
青あしを吹く風のひさびさの風呂へ行く
八ツ手の葉に動いてゐる影が月が八ツ手の葉

満洲 萩原 和夫

麥の穂遠く来てゐる國に母がある
朝たなき身を夕陽の野茨の花の吹かれる
糸柳の芽ぶく梢夜はよで爆音のしてゐる
隣も同じやうな官舎ぐらしのこれほうちもの茄子の苗

三重 東 草二郎

臺所では蕨の話が花は散つてゐる
朝蟬聞くやうになつてから降ればいゝ梅雨は降らない
機械の音が晝の町のしづかさには鳴いてゐる
裏に見えるなんばや南瓜や音は晝近い厨へ

京都 藤原アサ

けふは戻り遅くて並木の木蔭のびてゐる、夏
あかつきしらむころの青葉がよんべの雨
まいにも同じ星が晴の一つ星春はきてゐる
花が咲きあはく咲き青空へものを干します

榎木 鹽田 正吾

鳥の聲も麥畑麥日和の夕やけ
警報下の一筋町で山がもりあがる雲
水音あまいはなのあまくてさいてゐる
ともると四五軒の麥の穂

熊本 高木母子草

山に遅月がこの町空襲の状況下にある
とほり雨がすぎるとかつこう青葉しづくしてゐる
葉ざくら手をひけばあるけるあるかせてゆく

名古屋 長谷川敏郎

かほちや黄な花雄花がちなのも夕べは涼しい
草に置いた包みと水田にうつる青い山と一服する
櫻若葉して風のふく夕べの石段

西宮 竹内 孤明

今日も祭の朝早いたいこ雲のかたち
風が涼しい頭になつて星が出てゐる
旅は鳩のなく障子をあげてゐる

福岡 武鑑 青杏子

蛸貝はちさいひとつひとつを朝、働きたゆく
征く人とその子と人と驛のサツタ空が青い
月が降らしたあとのばらばら木から降る

尾崎 佐藤 龍

このごろ秘め事のあり芋の花が咲きます
目薬目につめたくて夏の朝ひとりある
茄子の花咲けばいまさらに一年が過ぎてある

廣島 菅 無極

遠くの汽車の笛が朝焼してある
いつも花が咲いてある庵の、けふの涼しさ尼さんひとり
橋の交番は柳が夏になる月になる

京都 内藤 英夫

山へ夕日の入つてからも田を植ゑてをる曲らず植ゑてをる
朝が雀と雨のあがつてある松の木一本
月の雲を出てあるかがげが戦況きいてゆく

千葉 福本 逸子

芋の嫩い葉久しぶりの田舎の風で
雨のあと静かな風が向日葵大きく咲いてある
水すまし輪をかいて輪と流れゆく

宮城療 加藤 黛 杉子

素焼の鉢買うて貰ひ櫻草植ゑて貰ひ病んである
棕櫚の葉ゆれてある齒科室の白いカーテン
髪あんである少女と少女達朝が涼しい

長野 栗田 白夢

ここに工場が建つかけ鷹が朝から麥の穂出てる
供米完了枝に葉が出て煙出しけむあげてある
どこに蒔いても豆になる豆をまくおばあさん

東京 高橋 耕吉

敬禮の眼がわらつてゐて楓の青さ征く

花の散る、しきりとそんな夕べである
かわず鳴くかわず鳴く月が出る

東京 山口 道夫

爆音まいにち暗れて蚊をたたきつぶした血など
かげると晴れてくる海の方子等の聲々

沼津 小菅 静舟

白いそばの花から富士に明けてゆく
湯けむり湯街が朝霧はれてゆく

岡山 岡田 花野

佛に御灯あげてから朝顔の芽を見てある
梅雨ぐもりて障子の病む人の爪切りで居る

愛媛 二宮 正史

麥秋わたる風の湖が海のやうな
田植の見える道の苗のおいてあるなど雨

愛知 杉本 幸一

春浅い山の影して尾張大橋その船
五月ぐもりの白い花つけた南天活けてある

京城 篠崎 早男

ここからさくらの京城の空が俯瞰撮影禁止
芽ぶく木を映してある貯水池の水高標

東京 堀切 勤

路ばたひまの木日々暑く日々戦局
鴉おりてゐて日ざかりの送電線がある景色

東京 中村 正明

入道雲水浴びした雀は枝にをる
ひる顔さけばひる顔の話など町へ出るみち

新潟 五十嵐みい

ほほかむりの寒い月で風呂へ来いとよ、
残る雪と無の縁の明るくて暮れず

横濱 東 信太郎

夏の火蟲目鏡でつけるなどして警報の空が青い
玄關に炭一俵あり朝の涼しく靴みがいてゐる

新京 中川 満哉

いつ死んでもの認識標のぬくみと更に奥地へ征くとする
今日はひと雨きなさるか網戸に蠅がひとつ

東京 印南 一可

警報が出た空の木魚ぼくぼく朝は涼しい
行々子ないてゐる女は女同志で

大阪 阡陌 多代

朝顔の鉢一つとこの夏をすこすやうすこの家
三丁ばかり歩いたところの夜を鳴いてゐる蟲

秋田 菅原 裸歩

兵隊の通つたあとの青い山牛追うてゆく
親にそむかず夏となり日々働くからだで居る

濱松 渡邊 天仙果

一日耕して莫塵のぬくもり抱へて歸る
松の木の下ラッパ隊小休止一人は吹いてる

静岡 遠藤 源治

黒々と蟻がかたまつてはいる小さな穴で
ときどき雲が影しては蟬の聲ばかり暑い

東京 福田 友之

舟をもやつて洗つてゐる裸で

妻やら軒にいつばいお婆さん汽車が通る

宮城 渡邊 草子

英靈の家として梨の花の白くして
螢一匹蚊帳に這はせて臥してゐる

長崎 石川 裸木

家族ら故里へ、いちじくの枝のいちじく
すすしい林のなかのみち開襟シャツで出勤

満洲 清水 たかを

これが球根から出た芽のちよつと赤く朝を出てゆく
はだしの足の裏の芽をふんでゐた

宮城 土屋 曙子

枇杷新葉に雨が降り面會に來し父の老けやう
二年目の櫻咲いた白衣で兄弟面會してゐる

大村 梁瀬 翠水女

蟲鳴いてゐる山の夜明
明けて木のしづくする音ときく

大阪 梁瀬 阿羅與

水を吸ふ芽がある朝ラヂオ輕音楽
誰の話も戦のはなし夕べは南瓜のつる

福井 桑原 愚村

残業燈ほやほやふやけねちねち梅雨で
山口 小島 胡市

東京 浅野 智秋

青葉の山を前にして列がそろふとラヂオ體操

愛知 星野 明

戦況だまつて聞きだまつて妻秋働いてゐる

ばんざいの手が手が青芦の風汽車の速くて
海軍 鈴木 敬藏

朝も晝も體操も裸であつて田圃は青くて
海軍 鳥居 芋爽

茄子畑の茄子の花それから浴衣になる
廣島 寺尾 無垢

塀の和平建國の大文字月夜は涼しく
駐北支 竹谷 正勝

月からひよつこ戻つてくるやうな何か咲いてるやうな
駐北支 清水 勇吉

熟れ麥のにほふてゐる英靈として還らるる
大阪 宇野 喬子

長い貨物列車が通る梨の花ちつてゐる
北鮮 戸澤 正一

並木の櫻青葉を朝は牛に乗つてくる
藤澤 吉田 富雄

山の上の電信棒が繋つてゐるのを暑い雲で
朝鮮 松村 龍雲

トマトの花はひそかな月が出てゐる
神奈川 傷療 中西 國友

親子で國民服できて旗日晴れた空町内會
大阪 海堀 壽一

温泉へ近みちの畠のそばの花
長野 川久保 天狼

昨日の作業服洗へば青草の匂ひがする
千葉 深山 きよ

服掛に服はかけて涼しい灯にして、さて
大阪 藤原 漁舟

馬鈴薯ごろごろころがして巻脚絆といてゐる
山口 大中 青塔子

簡單服でちよつと出て瓜の花茄子の花水をやる
岐阜 鈴木 綾子

そこらに蛙がいつびきゐるらしい病んでゐる
東京 栗澤 淡々

行々子葎の葉この頃田植最中
東京 鈴木 水帆

ひまの實ももろこしの葉の風も校庭暑くて
京城 廣保 麥穗

田植あらかたすんだ電燈に灯とり蝨くる
長野 栗田 千可志

道の端もはたけにした菊菜まびいてゐる
京都 高橋 又兵衛

朝早く豆の花咲いてゐる工場の横
三重 伊達 宗勝

月にうつすり暈がある北斗をさがす子とゐる
東京 安田 爐中火

箱植のトマトの花二階住ひともお別れ
福岡 下田 麥

青葉の雨の離病舎へは傘で行く
横濱 近藤 眞佐夫

花になる芽葉になる芽の門登校時間
岐阜 肥田 樂山子

町を汽車がはづれると月の出る山のかたち
長野 酒井 健之

苞も見えない地平までの草原のこのあたり
蒙 疆 前田 零堂

道がだんだん細くなる松林どこまでも松である
東京 椿 本 操

胡瓜に鹽つけてたべるうちの子も日ざかり
三重 高木 麻城

工場の煙突のたくましい煙虹が出て
神奈川 鹿井 糸二

青桐の青い影で子供たちなはとび
東京 高林 三郎

母の話がぐちになるつめたいお茶のむとする
東京 高安 朝次

夕立のあとの夕日になり庭木のなかの紫陽花
東京 加藤 菊水

ござ敷いておもちゃたくさん木の下の風
東京 瀧川 安彦

さわさわ藪に風があると人がゐて伐つてゐる
京都 吉田 光吉

かつこうかつこう又銃してひるにする
駐滿洲 眞野 義武

ゆくと白樺の林になるそこにも咲いてゐる
駐滿洲 三國 魚竿 水

看護婦さんの蓖麻の葉にも雨がふる誰かくる
駐臺灣 青木 喜作

鉢の花もしづかに散つてしまつた鉢のその色
駐滿洲 阿部 傳

しみじみ麥の一粒を陽の中にあて
駐滿洲 荻野 亂打

マアチヨかたかたたんぼぼ咲いてゐる道
大連 二神 布佐 女

その母としてひとりゐて土に種まいてゐる
三重 楠 卓子

月夜の残置燈のところまできてハモニカ吹く
大阪 木村 月果

障子の棧の一つ一つと庭の青葉を病みてゐる
東京 沼田 日露子

昔のやうなみづぐるま道が山へゆく
東京 水谷 清照

先生と並んであるきポプラの並木日ざかり
大阪 根來 フミ子

ひろびろと雲が影してはくる滑空機訓練
三重 龜井 團太

この子達も勤勞奉仕蛙は遠くで鳴いてゐる
和歌山 御井 弓枝

百合を活けて何か明るい氣持白い紙に書いてゐる
神戸 中島 義光

風が煙を吹かない炎天の煙突一本
兵庫 村村 哲夫

草を摘み食べられる草ばかり籠にいつばい東京へ去ぬ
東京 成川 子柳

埼玉 瀧澤 流木

四號棟の空に月がでて夜勤に出てくる

東京 清水雄二郎

並木の青葉その子もこの子も新しいモンペで疎開の話で

東京 作間比露詩

吊皮揺れるばかりで夜が涼しい

横須賀 矢島 寒雄

風速計が廻る見える窓がある教室に變つてきた

東京 仁木 堅二

こころひとり食べられる草とて摘んである

岐阜 間宮折鶴子

いちづに草刈り朝日さす所ささないところ青い草

大阪 勝 醜句男

女来て橋を渡り青い山がある

長野 八重田保郎

股引は洗つてかけておく蛙ないてある

大阪 谷 雨 滴

ひる前しづかな看護婦食堂の壺のダリヤ見えてある

香川 西崎 千草

蘇鐵がずんぐり窓の外ガアゼ干しておく

駐臺灣 砂川 鳳凰木

暑く花のうるはしさ風がある窓

川崎 深澤 菅介

白い道夕暮れる裸馬ひとつくる

駐〇〇 並木 緑朗

敵を待ちて山が繋つてくる鶯笛でも吹いてある

駐滿洲 辻本 螢石

軍歌演習影は木に月が出てある

駐比島 五十地 皓一郎

防人としてこの島の貝がらを手にしたりする時間

神戸 高柳 登一

朝のうち鼻に白い開襟シャツで出てある

愛知 積木 昶楓

警報とけた朝の隣の南瓜の大きな花で

駐東北 新村 和也

けふも曇りて空のその遣けふの爆音

姫路 古城 白鷺

軍歌が過ぎてから夕日に水撒いてある

駐臺灣 根田 月子

夕焼ける遠い地平は敵のゐる丘になつてある

千葉 長谷川 一郎

雲が雲が走つて走つて月が出る

廣島 野北 菊江

すねてみせる親のある風鈴に風のある

新潟 金津 明子

ひとり汗のあとすつぱいくだもの

三重 水野田々 詩

雨があがつた一面麥秋速い電車で

尼崎 廣橋 清志

その報道が耳にある星夜の電車待つてある

山口 藤井 鳴木 兎

椿の花かさかさと落ちる音の山道雨はれたので登つてゆく